

これはイエスの生涯についての最も古い文書のひとつです。この章の最後の方で著者はイエスの側近でありイエスが愛された弟子と呼ばれたものであることがわかります。この書には著者が何回か登場しますが、これが十二弟子の一人であるゼベダイの子のヨハネか、あるいはエルサレムに住み、後に教会の長老として知られる別のヨハネなのか議論が分かれます。いずれにしろこの書は著者が目撃したことを記したものであり、終わりの方に書かれている目的に沿って緻密に書かれています。その目的とはイエスがメシアであることをあなたがたが信じるためであり、また信じてイエスの名によって命を得るためです。ヨハネはあなたがこの書の中に見出すイエスとは、今も生きていてあなたの人生を永遠に変えることができると信じているのです。

この章の構成はとても巧みで前半は少し短いストーリーのプロローグ。次に議論を巻き起こすイエスの奇跡のストーリーがいくつも入っています。そしてその流れのクライマックスが、ラザロを蘇らせるという最大の奇跡ですが、これが最大の議論にもなり、イスラエルの指導者たちがイエスを殺す決意をしたほどでした。そして後半はイエスの最後の夜と弟子たちに残した言葉に焦点が当てられ、続いてイエスの逮捕、裁判、死、よみがえりが記されています。そしてエピローグで締めくくられていますが、このビデオでは前半を学びます。

前半は二つの要素からなるプロローグで始まります。

まず「はじめにことばがあった」で始まる詩で、これは明らかに創世記1章で、神が言葉によって世界を創造した時のことを指しています。人が発する言葉の場合、その人と言葉とは別物ですが、言葉はその人の心や石を外に表すものでもあります。要は、「ことばは神とともにあり」とことばと神を区別して語りながら、ことばは神であったとも言っています。これを心に留めながら読み進むと、後に出てくる詩の中でこの神のことばがイエスという人間になったことがわかります。

次にヨハネは出エジプト記を引用しながら、イエスは我々の只中にある神の幕屋だと言っています。契約の箱の上にあった神の栄光の現れは、イエスにあって人となりました。そしてイスラエルの唯一の神は父なる神と子なる神であり、子なる神は父なる神を表すために人間になったというのです。これらの宣言に続き、バプテスマのヨハネとイエスは出会い、ヨハネに紹介された人々がイエスの弟子になり、そしてイエスに出会った人々がイエスはいかなる存在だと思うかを次々と告白します。この1章の中でイエスは7つの称号で呼ばれていますが、ヨハネは本書においてこの7という数字を好んで使っています。そしてこれらはイエスについての一つの宣言になっているのです。すなわち完全な人間であるナザレのイエスはメシアなる王だということ。彼はイスラエルの教師であり、世界の罪のために死なれる神の子なのです。これは非常に重要な宣言であり、ヨハネは2章から12章のストーリーを通してこれを説明しようとしています。それらのストーリーには全て同じパターンがあります。イエスがしるしを示したり、ご自身のことについて述べると、人はそれについて誤解するか言い争うかするのです。そして最後にはイエスとは誰なのかについて、自分の結論を迫られます。

最初のセクションで、イエスはユダヤ教の四つの伝統的なものに対して、彼こそがそれを成就していると示しました。まずイエスが出席した結婚式の祝宴でワインが切れてしまうと、イエスは合計数

百リットルの水がめの水を最高級のワインに変えました。給仕長はこんないいワインをよく最後まで取っておきましたねと花婿を褒めました。ヨハネはこの最初の奇跡を最初のしるしとも言いました。言い換えればこれはイエスの性質を表す象徴だったのです。イザヤが予言したように、メシアの王国は良いワインがたくさん振る舞われる大きな祝宴のようなので、この最初のしるしである奇跡は、イエスの王国の豊かさを表しているのです。

次にイエスはエルサレムの神殿にきました。ここは天と地がひとつになり神がご自身の民と会うはずの場所です。イエスはそこで両替人を追い払い、犠牲の捧げものを止めさせることによってご自身の義を表しました。そして神殿の指導者たちがイエスを脅すと、「この神殿を壊してみなさい。私は三日でそれを建てよう」と答えました。イエスはこの時ご自身の犠牲の子を通して、天と地が本当に一つになると語っていたのです。やがて殺されるイエスの身体こそが、神

殿が象徴していた究極の真理でした。

三つ目は、イエスが夜通し会話をしたニコデモというユダヤの教師ラビでした。彼はイエスもイスラエルのラビの一人だと思っていました。しかしイエスは、イスラエルが必要としているのは教師や新たな教えではなく、新しい心と新しい命だと語りました。つまり「人は新しく生まれなければ神の国を見ることはできません」ということです。人は皆、自己中心と罪に絡め取られ、死に向かっていることをイエスは知っていました。しかし神がこの世は愛しておられることも知っていたので、人に新しい命を得る機会を与えるためイエスは来られたのです。この後イエスは北に移動し、ユダヤ人ではないサマリアの女性と聖なる井戸で会話を交わします。二人は水について話していましたが、イエスは途中からそれを比喻として用い、自分は永遠の命の源となる生ける水をもたらすためにここに来たのだと言いました。この焦点の永遠の命とは、神の永遠の愛で満たされる新しく豊かな命をさしています。この命は今すぐ与えられいつまでも続くものです。

続いてヨハネは、ユダヤの四つの聖なる日や、祭りの間に起きた出来事をいくつかまとめています。ここでもイエスはご自分が何者であるかを示すために、聖なる日は祭りの様子を取り上げて語りました。まずイエスは体に麻痺のある人を安息日に癒し、ユダヤ人指導者たちの間に安息日に人を癒していいかどうか議論を巻き起こしました。イエスは私の父が安息日に働くのだから私もそうすると言いました。指導者たちはイエスが神を父と呼び、ご自分を神と同等のものにした事に気づき殺意を抱きました。次の事件は出エジプトを覚え、それを象徴する子羊、パン、ワインの特別な食事をする過ぎ越しの祭りの時におきました。イエスは何千人もの群衆に奇跡を通して食べ物を与え、その結果人々はもっとパンを与えて欲しいとイエスに願ったのです。そして「いいですか、自分はまことのパンであり、わたしを食べる者は永遠の命を見出す」と言うと多くの人々が怒って離れ去って行きました。

この後はエルサレムで仮庵の祭りの期間に起こった出来事が記されています。仮庵の祭りとは、荒野を彷徨ったイスラエルを神が雲の柱火の柱になって導き砂漠で水を与えてくださったことを記念する祭りです。イエスは神殿の中庭に立ち、「誰でも乾いている者のはわたしのところに来て飲みなさい」と叫びました。また「わたしは世の光です」とも言いました。これは、ご自分が神の臨在そのものであり、命を救うための神から民への贈り物だという意味です。それを聞いてイエスに従った人々もいましたが、がっかりして離れていく者やイエスを殺そうと企む者もいました。

最後のストーリーは西方剣を意味するハヌカの祭りの間におきました。これはユダ・マカバイが神殿から偶像を排除し、聖なるものに回復したことを記念する祭りです。イエスは神殿に行きご自分こそが神の聖なるものであり、神の臨在が宿る真の神殿であると言いました。また「わたしと父は一つである」とも言ったのです。エルサレムの指導者たちはこれを聞いて激怒し、イエスを殺そうとしたのでイエスは街から退きました。

これらの摩擦は最後の奇跡でピークに達します。イエスは親しい友であるラザロが病気だと聞きますが、ラザロはイエスをつけ狙う者たちがいるエルサレムのそばに住んでいます。身を守るためには近寄ってはならない場所ですが、イエスはラザロ愛していました。それでラザロの死を知らされたイエスは、命を危険にさらすことを承知で出向き、死んだラザロを墓から呼び戻したのです。この驚くべきニュースは瞬く間に広まり、イエスが予期した通りエルサレムの指導者たちはイエスを殺す計画を立て始めました。イエスにご自分の民の指導者達に拒絶されるイスラエルの王としてエルサレムに乗り込んでいったのです。

ヨハネの福音書の前半は、イエスが友のために命を投げ出すようなこのストーリーで終わります。これはもちろん来るべき十字架を指し示しているのですが、それについては次のビデオで学びましょう。これがヨハネの福音書の前半です。

【要約】

この文章は、イエスの生涯に関する最も古い文書の 1 つであり、ヨハネによる福音書の最初の半分についての要約です。ヨハネの福音書は、イエス・キリストがメシアであることと、イエスの名によって永遠の命を得るために信じることを強調しています。文章の構成は巧みで、前半ではイエスの性格を示すさまざまな奇跡と出来事が述べられており、それに続く議論が強調されています。また、イエスの言葉や行動を通じて、彼が神の存在と人間とを結びつけるものであることが示されています。この文章では、ヨハネによる福音書の主要なテーマとイエスの性格に焦点が当てられ、さまざまな出来事と奇跡が要約されています。